HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	初期ルカーチにおける内在と超越の問題 ： ハイデルベルク美学論稿研究序説［全文の要約］
Author(s)	秋元, 由裕
Description	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。 https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第12504号
Issue Date	2017-03-23
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/65736
Type	doctoral thesis
File Information	Yusuke_Akimoto_summary.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

『初期ルカーチにおける内在と超越の問題：ハイデルベルク美学論稿研究序説』
要約

秋元　由裕

文芸批評家・美学者としてその名を知られたルカーチ・ジェルジュ Lukács, György（1885-1971）が、一九一八年末に突如としてハンガリー共産主義者党に参画し、「西欧マルクス主義」の代表的な理論家へと転身した思想的遍歴については、これまでに多くの研究が蓄積されてきた。にもかかわらず、ルカーチが一九一二年から十八年にかけて取り組んでいた美学体系構想「ハイデルベルク美学論稿」（Heidelberger Schriften zur Ästhetik）は、研究の題材として取り上げられることが極めて少ない。また他方、マルクス主義者としてのルカーチを代表する著作『歴史と階級意識』に関しても、ハイデルベルク美学論稿との連関において解読する試みは皆無に等しい。こうした状況にあって、ルカーチの思想は「反省的に基礎づけられていない価値確信」に基づくヘーゲル流の「目的論」として理解され（例えばアクセル・ホネット）、アドルノらフランクフルト学派批判理論にとっての単なる＜前史＞という位置を与えられるにとどまっている。これに対して本論文は、ハイデルベルク美学論稿の内にルカーチの革命的実践への志向を読み取りつつ、『歴史と階級意識』の思想をハイデルベルク美学論稿の中心的構想「美学の現象学」からの然るべき展開として把握することで、初期ルカーチによる物象化批判の今日的意義を捉え直すことを目的としている。

無論、ハイデルベルク美学論稿それ自体の中に何らかの政治的言説が明示されている訳ではない。しかしだからと言って、その美学論稿が社会的現実とは無関係に純粋美学の構築のみを目指しているのでも決してない。美学体系の背後に込められた実践的意味を洞察する上で手がかりとなるのは、ルカーチがこの世界の「体験的現実」（Erlebniswirklichkeit）に対して芸術作品をどのように距離化させて論じているのかという点である。この観点からハイデルベルク美学論稿を解読するとき、一九一二年から一四年にかけて起稿された『芸術の哲学』（*Heidelberger Philosophie der Kunst 1912-1914*）と、第一次世界大戦による中断を経て後に一九一六年から一八年にかけて教授資格申請論文として起稿された『美学』（*Heidelberger Ästhetik 1916-1918*）との間には、決定的な差異が確認される。すなわち美的領域は、『芸術の哲学』においては「体験的現実」からの救済領域として「ユートピア的現実」と呼ばれていたのに対し、『美学』においては、「体験的現実」に従属した自然的態度からの「背馳」（Abwendung）を遂行した主体性によって創出されるべき新しい現実性として、それぞれ全く異なった位相において基礎づけられているのである。

物象化批判の問題は、既に最初期の著作『近代劇発達史』（*Entwicklungsgeschichte des modernen Dramas*, 1907）以来、ルカーチが一貫して抱え続けてきた主題であった。ハイデルベルク美学論稿において「体験的現実」という術語で端的にそのテーマが凝縮されているとすれば、第一次大戦後の『美学』が「体験的現実」の主体性を変革することにおいて美的な

ものの可能性を追求したことそれ自体、すぐれて実践的で政治的な含意をもつ。つまりルカーチが『美学』の中で示した主体性の変革という思想の内には、一九一八年末の思想的転回が予示され、さらには『歴史と階級意識』における主体性論の原型が成立していると考えることができる。それ故に『歴史と階級意識』についても、ハイデルベルク美学論稿の読解をつうじて従来とは異なったアプローチを図ることができるはずである。このような展望のもと、本論文は次のような手順によって議論を進める。

第一章では、ハイデルベルク美学論稿についての研究が決定的に不足している現状に鑑み、このテクストの資料状況、成立史、受容史と先行研究の現状について概観する。この作業を通じて、従来の研究が美学論稿を単純に美学理論の次元でのみ扱い、ルカーチの物象化批判の思想と何ら関連づけてこなかったことが問題点として示される。これに対して本論文は、美学論稿が一九一八年におけるルカーチの「転回」直前期にあるテクストであることを踏まえ、『芸術の哲学一九一二－一九一四』までのユートピア思想が『美学一九一六－一九一八』をつうじて革命的実践の思想へとどのように変容したのかを、解釈上の問いとして提起する。

第二章では『芸術の哲学』の思想的実質を、「ユートピア的現実」という芸術作品概念に即して明らかにする。ルカーチは最初期の『近代劇発達史』以来一貫して、物象化された「体験的現実」における人間相互の関係を「誤解」の問題に即して論じていた。彼によれば、「生活の物件化（Versachlichung）」が全面化した近代社会にあって、一方による意思伝達が他方によって了解されることなしにむしろ誤解されることが繰り返され、個々人の内面を独我論的な感情が覆い尽くす。ルカーチは芸術作品を、このように「誤解」に満ちた「体験的現実」に対立するものとして捉える。というのもルカーチにとって作品とは、その創造者と受容者の双方によって「誤解」されること、「二重化された誤解」によって成立するものだからである。作品に「表現」された「体験」が「理解」される――ディルタイの言うように――のではなく、むしろ誰もがそれを誤解することの出来るものこそが作品として体験され得るのだとすれば、この作品は、誤解によって生じていた現実の不協和を浄化させる意味をもつ。このようにして芸術作品は、ルカーチによって「ユートピア的現実（utopische Wirklichkeit）」と規定された。『芸術の哲学』におけるこのような作品概念からは、物象化された「体験的現実」に対するルカーチの絶望と共に、この現実から逃れることのできる救済領域として芸術作品を憧憬するユートピア主義的態度を見て取ることができる。

第三章では、「誤解」概念を主軸として芸術作品を「ユートピア的現実」と呼んだ『芸術の哲学』の思想が第一次世界大戦をつうじて変容させられ、『美学』において革命的実践の思想へと転換する過程を示す。そのためにまず『芸術の哲学』と『美学』との比較分析を行い、美学諸概念から美学体系構想に至るまでが全面的に変更されていることを確認する。この転換がどのような意味をもつのかを考察するにあたって、本論文は、芸術作品の「ミクロコスモス」的性格に関するルカーチの新たな把握、そして芸術を救済領域の一つとして「諸

価値の多神教」論の中で相対化したマックス・ヴェーバーの言説を手がかりとする。芸術の小宇宙の内に「ユートピア的現実」を見出して救済を待望する限り「体験的現実」全体は何ら変更し得ないのだとすれば、このような限界の認識がルカーチを美学論稿の再編へと衝き動かしたのではないのだろうか。こうした想定から『美学』のテクストを読み解くならば、そこで新たに構想された「美学の現象学」が、ルカーチが準備しつつあった革命的実践の思想を表現していることが示される。

第四章では、「美学の現象学」がヘーゲルの『精神現象学』に準拠することをルカーチ自身が述べている点に着目し、ルカーチの現象学構想がどのような内実を有する現象学であるのかを明らかにする。そこで『美学』第一章「美的措定の本質」において提示されたヘーゲル批判の論点に即して『精神現象学』の再解釈を試み、ヘーゲル現象学が「意識の経験の学」ではなく「絶対知」の目的論に化していること、それ故に現象学的行程を経験する当事的意識に対して他律的な強制連関が生じていることを指摘する。この考察をつうじて、ルカーチの「美学の現象学」が、美的価値を志向する一個の目的論でありながら、同時に目的論としての他律的な強制連関を廃棄して当事的主体の自律性を実現しようとする逆説的な試みであることを示す。

第五章では、『歴史と階級意識』の準備期にあたるハンガリー革命期から「三月行動」以後（一九一八年から一九二一年まで）の政治論文を題材として、前衛党および党員知識人の役割に関するルカーチの言説が、「美学の現象学」の思想を現実変革の領域へと無媒介的に転移した結果の一つであることを明らかにする。「美学の現象学」について上に述べた逆説性が美学体系の内部で矛盾として顕在化しなかったのは、あくまでそれが「美的価値の体験的性格」に基づいていたからであった。しかし、現実変革の領域において自然的態度からの「背馳」という美学的思想が貫徹されるとき、この思想は、現実をそのコンテクストに対して外在的な立場から支配する超越的態度を導くことになる。本章では、実際にルカーチにおいてはそのことが彼独自の初期マルクス解釈と結びついて、「階級意識の意識化」という主観主義的な思想を生み出したことを示す。

第六章では、『歴史と階級意識』の中心論文「物象化とプロレタリアートの意識」（一九二二年）を主な題材とし、ホネットの言う「オフィシャルな観念論的表明」としての「同一的なる主体－客体」概念それ自体が、前章に見た「階級意識の意識化」論からの転換の結果であることを示す。つまり『歴史と階級意識』の思想は、一九二一年までの時期にあった主観主義的契機を一旦は廃棄し、物象化された現実諸連関の只中にある当事者にとって内在的な社会批判のあり方を新たに追求する試みとして把握される。この点を具体的に検証することなく、先行諸解釈がルカーチに対して「観念論」のレッテルを投げかけてきた背景には、「同一的なる主体－客体」概念を主体と客体との「同一性」と混同する理解がある。そこで本章ではこの二つを厳密に区別することによって、「同一的なる主体－客体」という主体概念に示されている思想を、＜未在のものの目的論＞として解釈する。この理解によって、「美

学の現象学」が物象化批判と革命的実践の問題領域においても、変革的行動の主体性の側に立った内在的かつ超越的な批判理論として継承されていることを示し、また『歴史と階級意識』の思想が、コンテクストに対する内在的超越性を備えている点で社会批判の理論として今日なお意義を有することを確認する。

これに続いて補論では、これまでルカーチの思想を内在と超越の問題軸に照らして検討したことを踏まえ、マルクスの思想との対比を図る。周知のように、『歴史と階級意識』が一九二三年に刊行された時点では、ルカーチがマルクスの『パリ手稿』に接する機会は未だなかった。にもかかわらず、＜未在のものの目的論＞はマルクスの疎外批判論と共通する思想的実質を有しているように思われる。昨今、初期マルクスによる疎外批判論の根底に見出されてきた本質主義的ヒューマニズムは、基礎づけられていないイデオロギーとして斥けられる風潮にある。この補論では、むしろマルクスの本質概念は反本質主義的実質を有するものであることを明らかにすることによって、反本質主義の思想においてルカーチとマルクスが共通する基盤をもつことを明らかにする。

以上の議論によって、（一）ルカーチの思想形成過程を理解する上でハイデルベルク美学論稿が不可欠な題材であること、（二）ハイデルベルク美学論稿の思想に照らして『歴史と階級意識』を再解釈するならば、ルカーチの物象化批判における「オフィシャルな観念論的表明」を「基礎づけられていない価値確信」に基づく「目的論」だと単純に批判するのは不当であること、（三）むしろ、「美学の現象学」から『歴史と階級意識』に至る思想的展開の中に読み取られるべき＜未在のもの＞という思想は、本質主義を回避しつつ同時に批判のための準拠点を要求する現代の社会哲学にとって大きな意義を有すること、これらの諸点が明らかとなる。